

株式会社ダイヘン代表取締役社長

養毛 正一郎（みのも・しょういちろう）様 インタビュー

はじめに

(会長) 本日は大阪大学工業会の「各界で活躍されている卒業生への会長インタビュー」のためにお時間をいただきありがとうございます。それではよろしくお願い申し上げます。

大阪大学工業会にとって、同窓生が各界で活躍されることは、同窓会会員としても誇りであると共に、その活躍の見える化で、母校の価値を高めることにも寄与されているものと考えております。大阪大学工業会では、ホームページを充実させて、情報発信機能を更に高めると共に、同窓生間の交流の場としても活用されるように改編を進めておりますが、同窓生で各界にてご活躍の方々に、会長がインタビューを行い、同窓生の大学への想い、各界で活躍の原点や努力の源などをお聞きし、同窓生各位の今後の活躍や目標へのある種の触発を誘起するようなお話をお伺いすることにいたしました。



本日は、株式会社ダイヘンの代表取締役の養毛 正一郎社長様にお話を伺いたく存じます。

養毛社長様のご経歴については、添付資料でご紹介いたしていますが、1987年に大阪大学大学院工学研究科 電子工学専攻修了後、同年株式会社ダイヘンに入社され、数々のご経歴のように重責を担われた後、2021年4月に代表取締役社長に就任されております。

今日は同窓生、特にこれから活躍する若い人々に、是非有益なご助言と檄を飛ばしていただきたくお願い申し上げます。

一人暮らしを求めて大阪大学工学部へ：なんとなく電気系が面白そうだと

(会長) ところで、養毛社長様は、1963年1月1日生まれと、誠に目出度い日にお生まれでしたね。

(養毛社長) そうです。正月という大変な時に迷惑をかけたようです。生まれは山口県ですが、2才から高校まで鹿児島にいました。

(会長) はじめに、皆様にも同じように質問しているのですが、養毛様は1981年（昭和56年）大阪大学に入学されて鹿児島から出てきておられますが、大阪大学を目指されたのは、何か動機などがございましたか。

(養毛社長) 実は、鹿児島の高校でしたので、大阪大学のことは全く知らなかったのです。我々の時代は共通一次世代で、共通一次が始まって3年目ぐらいだったかと思いますが、共通一次試験が終わって

から、どこの大学を受験しようかと迷っているときに、高校の先生が大阪大学はどうだと進めて頂きました。そのときには大阪とはどこか怖いところだなという印象だったのですが、調べてみたら、有名な長岡半太郎先生が初代の学長であるとか、湯川秀樹先生が若いときに研究されていたとかの情報が有り、ちょっと受けてみようかなと言う気になりました。

(会長) 入試の動機で、長岡半太郎や湯川秀樹の両先生の名前を挙げられたのは初めて聞きました。ガイドブックの書き方など考えていただきましょう。

ところで、鹿児島出身となると、現役時代の私の研究室にも一人鹿児島出身者がいて、蓑毛様だとお分かりになるかと思いますが、「けけけけ」(貝を買いに行きましようか)や「けけけけけ」の意味を教えてください。独特の地域の言葉の例で、面白い話でした。九州では、割合と同じ音が続く言葉が多く、長崎で「ととと」(この席取ってありますか、空いていますか)なども面白く感じました。

しかし、最近は大阪大学へ入学する九州出身の学生さんの数は少ない傾向で、更に四国出身者もかなり少なくなっているのではないのでしょうか。工業会での同窓生の出身地に関する情報は分析できていないのですが、大阪大学も関西主体の大学になりつつあり、蓑毛様のような九州や四国出身者が多いという多様性がなくなっているのではないかと思います。

ところで、蓑毛様が工学部を希望されたときは、電気系はかなり希望者の多い時期であったかと思いますが、電子工学科を選ばれたのは、どのような動機でしょうか。

(蓑毛社長) 高校の勉強などから、電気系が一番面白そうだなと感じ、電気系は当時3学科だったのですが、通信は何を行うのかよく分からず、電子でも電気でもよかったのですが、それらを第1希望、第2希望にしたかと思います。

とにかく当時、県外に出て一人暮らしをしたかったので、特に大阪大学でなくともよかったともいえますが、大阪大学に入学できたことは県外脱出については希望通りでした。

(会長) そのようにして、大阪大学に入られてどのような印象でしたか。

(蓑毛社長) まず、当時はキャンパスがいろいろと分かれており、どこが中心なのかがよく分からず、たこ足のだと感じました。教養部は石橋でしたが、まだその時代に黒ヘルメットをかぶった連中がいたことも驚きでした。

ただ、大学は、いろいろなことを自分で決めて行かなければならず、その点は高校までとは違うなとも感じました。

(会長) 入学後教養部で講義を受けられてどう感じられましたか。

(蓑毛社長) いや、あまり積極的に勉強した記憶もないので、まあ、大学の講義とはこんなものかとの感じで、淡々と単位を取ったとの印象です。特に印象深い講義はありませんでしたが、兎にも角にも4年で卒業することを考え、単位だけは確実に取ろうと考えていました。

いま振り返って、大学での教養教育のイメージはほとんど残っていないのが実際です。

特に、大学に入ったのに、教養教育のみで、専門教育がないことには少し違和感を感じました。

(会長) その意味では、現在は教養部がなくなり、入学すると工学部の学生と言うことで、1, 2 年生は共通教育で教養教育を受講し、専門教育もクシの歯状に低学年におりていって、専門の先生方が石橋で講義することもあります。が、まだまだうまくマージした形態にはなっていないかも知れません。

(会長) その後専門課程に進まれるのですが、専門の講義が始まったかと思いますが、受講されてどのような印象でしたか。

(義毛社長) そうですね、専門としている電気系は、電磁気学にしても回路にしても、現象がきれいな数式で出てくるので、美しい学問だと感じました。必ずしも理解ができたわけではありませんが、きれいな方程式で表せることは感動しました。

(会長) 我々の溶接の分野では、確かに方程式で表されるのですが、現象が過渡現象で、ほとんど定常的な状態がないので、どこか難しいとも感じました。まあ、方程式に表示できることは、感動かも知れませんね。

専門での講義を受けての印象は思い通りでしたか。

(義毛社長) 思い通りと言うよりは、難しいなとは思いつつも、電磁気学など複雑な現象がきれいなカタチになっていて、ある意味スマートさを感じました。

大学生活を楽しむ：仲間をつくること

(会長) ところで、義毛様はクラブ活動ではサッカー部だったのですか。

(義毛社長) いや、大学ではクラブ活動は行いませんでした。高校まではサッカーをしてはいたのですが。今は、会社がセレッソ大阪のスポンサーをしており、その関係でサッカーに関係し、年1回は、いわゆる始球式などを行っています。



セレッソ大阪_セレモニー

学生時代にはクラブ活動はしていませんでした。奨学金ももらっていましたが、生活費と学費のためにアルバイトに精を出していました。当時は、アルバイトと言えば家庭教師でしたので、週3回以上も家庭教師に行っていました。当時は、夜に家庭教師に行くとなると、まず食事をご家族と一緒にということで、それも食費が浮くなどで助かっていました。

(会長) そのような状況で、大学生活をどのように楽しんでおられましたか。

(義毛社長) あの当時は麻雀がはやっていて、よくやりました。当時は、麻雀をしながら試験勉強をしていた強者もいました。

私は刀根山新寮の一期生で、寮では麻雀が盛んで、隣の部屋などは麻雀室になっていて、本人がいな

くとも誰かがきてやっているような状態でした。

大学生活の余暇の大部分が麻雀という時代でもありました。

(会長) 確かに我々の時代にも麻雀が盛んで、スキーに行ったときなど、朝起きて窓を開けて、今日は風も強くて寒いなー、こんな日にスキーに行くのか、ということで、朝から旅館で麻雀をしたこともありました。何しにスキーに来たかのか。ある意味、麻雀やスキーなどの遊び以外に、あまり楽しい遊びがなかったのも時代で、いまのように楽しいことが多くなかったことが、一つの遊び方に集中したともいえますね。

(養毛社長) いまは遊び方がスマートになっているともいえますが、我々の時代は、遊びが同期の仲間意識の向上につながっていて、ある意味その後のネットワークの形成につながったともいえますね。大学生活で、研究活動、特に工学部の場合は共同研究者のつながりが、その後の活動に大きくつながってはいますが、遊びを通じての仲間意識の構築は、いまの若い人には欠けているかも知れませんね。

(会長) そうですね、この仲間意識が高まらないことが、同窓会の活動にもはっきりと現れてきている感じがします。

大学での研究活動の意義

(会長) そのような学生生活を送られて、工学部の場合は4年生から研究室配属になって、卒業研究を始めることになりますが、卒業研究はどのような分野を選ばれましたか。

(養毛社長) 4年生と、修士では研究課題が変わったのですが、4年生では電子ビームの研究だったのですが、元々「制御理論」をしたかったので、修士課程では児玉先生の「制御理論」の講座に所属しました。制御理論が一番好きというか、スマートな感じがしたものですから。

(会長) その研究活動を行っておられて、研究というものをどのように感じられましたか。

(養毛社長) 卒業論文、修士論文を書き上げるのにはかなり苦労はしましたが、当時の研究そのものは現在の仕事内容とは直接に関係しないものの、やはり研究への取り組み方、いろいろな段階での工夫、それに時間をかけての論文の作成などのまとめ作業など、研究の仕方や課題の発掘などについて得られたものは大きかったと感じています。研究活動を行ったことは、いまも役立っているという感じを持っています。

(会長) そうですね、研究活動は、社会にいて役立つ大きな力をつけるもので、工学部の教育の特徴でもありますね。現役時代の経験から、昔は4年生、いまは修士2年の最高学年になると途端に人が変わり、研究を行うことで人をつくっているように感じます。

研究開発活動を重視する企業の魅力に惹かれて：学びの継続とやりきる力が重要

(会長) 修士課程では意義深い研究活動をされて、修了後に株式会社ダイヘンに就職されるのですが、どのような動機があったのでしょうか。

(義毛社長) 実は、阪大出身の先輩のリクルーターが来られ、その方がすごく強烈で熱い方で、自分の経験を蕩々と語られ、この人と一緒に仕事をしたら面白いかもと感じたわけです。それがきっかけでした。

(会長) ダイヘンさんには、阪大の卒業素方が多かったのですか。

(義毛社長) いや我々が入る前はそれほど多くありませんでした。

私は、あまり大きな会社には行きたくなかったのです。バブルの時代でしたので、大手の電機メーカーなどに入れば、歯車の一つになりそうだと思います。かといってある程度の規模も必要かと。その意味で、ダイヘンは規模的にはよいかなと思いました。

結局は先輩の影響がむちゃくちゃ大きかったのですが。

(会長) 入社後、情報によりますと、30代前半で、半導体製造装置向け電源の開発に従事し、電力消費量を大幅に削減できる電源装置を開発され、半導体業界における省エネトレンドを先取りするに至ったことが評価されているとのことですが、その研究開発での大きなポイントはどこにありましたか。



(義毛社長) その研究は、リクルーターに来られた方が、社内の新規事業として始められた研究開発で、ちょうど私もそのまま続けることになったものです。その頃は日本も半導体メーカーが活性化しだした時期でした。会社としては新規事業でしたので、社内に直積されたノウハウがあるわけではなく、外部のいろいろなところで教えてもらい、また情報を集めて勉強する日々でした。そこには、やはり優秀なメンバーが集まっていて、互いに勉強し合い、社内での関連部門に教えを請うたりもしました。とにかくお客さんが厳しかったので、その頃は働き方改革などの議論もないので、めっちゃくちゃ仕事をしていました。

開発の対象は高い周波数、メガヘルツとかギガヘルツという周波数の電源で、その安定性、精度などがポイントで、後発でしたが、なんとかお客様の要求に応えるカタチのものができました。

(会長) 入社されてその研究開発に没頭されたわけですが、このような取組の経験から、学生に何か伝えたいことはありますか。

(義毛社長) この開発は学生時代の研究とは関係ないことでしたが、学生の皆さんもいま行っている研究がそのまま役立つと言うことでないでしょう。大学では研究活動での進め方を学びますが、社会に出てからも勉強は引き続いて継続しなければならず、それが成功に結びつくといえるでしょう。

また研究開発には、問題解決力が求められ、「最後までやりきる力」が重要です。それに、会社では「自ら勉強」していかなないと力がつきません。自ら継続的に勉強を続けることが不可欠です。学生さんには、是非「自分から必要なことを勉強する」ことを常に意識して下さい。

技術開発力が命：独自性と貪欲さを重視

(会長) お話しいただきましたように、養毛様にとっては、入社後に新規事業の研究開発に携わられた訳ですが、この点の意義はどのように感じておられますか。

(養毛社長) 確かに新規事業に従事できたことは、上司、同僚、部下と全ての面で恵まれた環境でした。その意味で運がよかったと感じています。うまく運をつかめたことも幸運でした。

私としては、完全を目指して時間をかけるよりも、やりながら最適な方法を探す方が、性に合っていると感じています。

(会長) その後は、技術開発全般を見られる立場に立たれましたね。ダイヘンさんの技術開発のポイントはどこにありますか。

(養毛社長) ダイヘンは面白い会社でして、規模の割にはいろいろなことを行っているのです。変圧器関係、溶接機関係、半導体設備、あとロボットとか。大事なことは、他がやってなくて、ダイヘンしかできないことをやるのが大切だと考えています。

(会長) そういえば、第7回ものづくり日本大賞で、ダイヘンの銅合金の3Dプリントが優秀賞を受賞されましたが、その審査に関係していたのですが、銅合金の3Dは他にない技術で、銅にP(リン)を1%程度加えることで、ステンレス鋼並の強度ということで、独自の技術と評価されましたが、この開発には、材料技術にはほとんど関係しておられないロボット部門であったということでした。

そのことにダイヘンさんの技術開発力のすごさを感じたのですが。

(養毛社長) その折は評価していただきありがとうございました。この例は、ダイヘンの技術開発の方向を象徴するものともいえます。

ダイヘンでは、多様なカタチを評価し、かつ貪欲な技術開発意欲を重視しています。

事業展開に重点をしぼり、開発費を確保して、社会に貢献できる技術開発へ

(会長) ご経歴では、研究開発部門から、一時営業担当に移られておりますが。その後役員として活躍され、21年から社長として全体経営の重責を担われることになるのですが、企業経営の重点はどう考えられましたか。

(養毛社長) ダイヘンの経営では、前任者の2012年度からの「DAIHEN Value 計画」により、開発重視の企業としての基本的要件整備に一定の目処がついて軌道に乗っていると感じます。前任の社長は12年の長期にわたり、その間にかなりの変化が定着していきました。

その軌道を大事にしつつ、事業の重点分野を絞り、社会に貢献できる技術開発を目指し、技術開発力を大きな柱とした事業展開を重視したいと考えています。

(会長) そのような事業展開を考える中で、ダイヘンで、私どもに関係深い溶接技術分野は技術開発力を発揮される柱でしょうか。

(養毛社長) そうですね、電気自動車（EV）向けに車体の軽量化につながる溶接技術を開発するなど「グリーン」は重点分野の一つであり、溶接トップメーカーの一つを自認する中で、異材接合などの開発でますます貢献して生きたいと考えております。

(会長) そのような意味でも、技術開発力とその効果を高めるために開発費を増やすことを重視されていると伺いましたが。

(養毛社長) そうです、ダイヘンはメーカーですから、やはり、「開発が命」です。開発費をしっかりと確保し、意欲を高めることが不可欠です。

開発費は、以前は売上高比 3%程度だったのですが、前任の社長時代に 5%程度まであがりましたが、私が社長になって 1%上げようとしています。ダイヘンは、開発とその成果が全てで、開発を最優先と考えているのです。



EV 向けレーザ・アークハイブリッド溶接システム

開発を担う若手の活性化へ：誠実さと実直さを

(会長) ものづくりの企業において、開発費 5%と言うのはかなり高い企業といえますが。

(養毛社長) そうではありますが、企業の存続・発展のためには、まだまだだとも考えています。まずは、開発への意欲を高めること、それを継続することが大切でしょう。

開発に特化することは私の役目で、そのように経営できることが望まれるところでしょう。

この経営の理念を全社に周知するために、年 1 回、全社員に向けて社長方針を示し、この方向へ開発を進めて欲しいと、社としての重点の方向を示し、更に月 1 回、各事業部の進捗報告の中で、開発の状況・展開について確認することを行っています。

(会長) 全社の開発意欲を高めるためにも若い力が大切と思われませんが、何か工夫をされていますか。

(養毛社長) 開発成果を生み出すために、確かに若手の活力は重要で、社長との面談などでは、部・課長はいいので、若手に説明させるようにしています。そのことで、社の方針と自らの位置づけなどがより明確になると考えています。

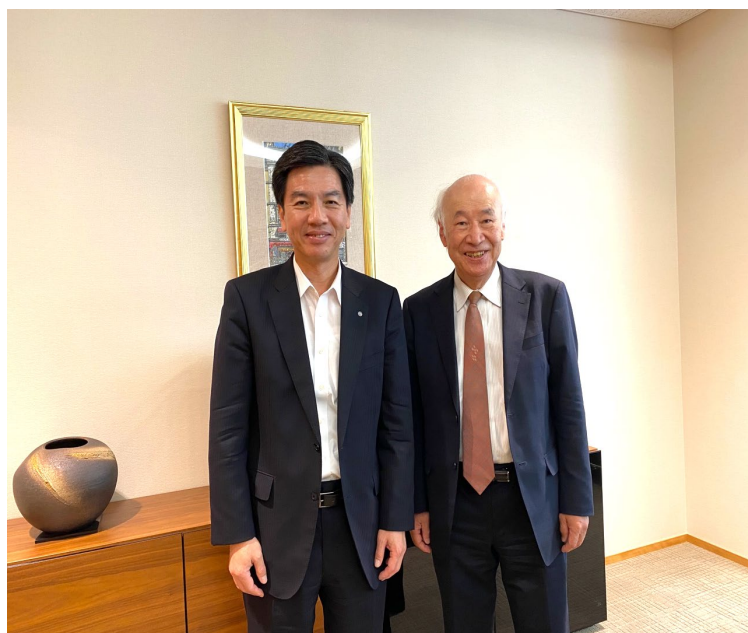
(会長) 若手との接触で、何か工夫されているところはありますか。

(養毛社長) できれば直接話をする機会をつくることを考えています。事業報告会もそうですが、それ

以外にも。社長の立場になると、こちらの意向とは関係なく、若手の方が気構えますので、いかに引き出すかについては気をつけています。

(会長) 養毛様は、普段から「誠実さ、実直さ」が大切と考えられているとも言われており、社長様の意向が伝わるといいですね。

社長の評価として前任者から、「仲間の一生懸命な姿に、すぐに涙腺が緩む『感激屋』だ」と評価されたと言うことですが、どうですか。



(養毛社長) 涙もろいかも知れませんが、涙腺が緩むというよりは、感動することを大事にしています。一生懸命に働き成果を上げたなら、やはりうれしくて感動しますよね。

セレッソ大阪には、一スポンサーとして支援しておりますが、サッカーといえども懸命な姿には感動しますうれしいですね。サッカーでは、チームとしてのまとまりが大切であり、同じように社内に「自由闊達な雰囲気チーム力を上げることに一つの刺激にもなっているでしょう。その上で開発分野をある程度絞り込む」との大きな方針も持っています。

次世代の開発課題と若い力への期待

(会長) ダイヘンの経営方針などについて伺いしてきましたが、最近の社会の動向などからニューノーマル時代などとも言われているこれからの時代にダイヘンとしてはどのように対応することなどをお考えですか。

(養毛社長) やはり、我が国が抱える社会課題、例えば政府が唱えている低炭素社会の実現や超少子化社会への対応の二つの大きな社会課題に対して、ダイヘンとしては、私の世代も、また次の世代も継続的に貢献できるように技術開発に努めていきたいと考えています。

(会長) そのような意味で、国内シェアが高い溶接技術分野でも大きな役割が期待できますね。

(養毛社長) 新しい社会をつくるための溶接技術開発も課題と考えており、例えば自動車でもEVに置き換わってくると材料が変わりますし、異材接合などの要求も増えてくるでしょうから、いまそれらへ貢献できるような技術的対応にも力を入れています。

このような現状・未来の状況からも、溶接技術が、いまのままのモノをくっつけるだけの技術でいいのか見直し、カタチを作る技術にも展開すべきであると考えています。もっと範囲を広げて「マテリアル・プロセッシング」の技術分野で、新しいものづくりを事業展開していきます。

(会長) そのような意味では、ドイツなどは早い時期から溶接接合で構造化についての動きはなされていましたが、ダイヘンさんがお持ちの技術レベルで、広い分野での活用が可能かと思われませんが、大切なことは、構造化が生きる確実な「設計」が重要で、我が国はこの設計がまだまだ弱いのではないかと感じております。ダイヘンがお持ちの技術力に期待ですね。

このような新しい動きのためにも、若い人々の活躍が望まれますが、何か若い人に期待することはありますか。

(養毛社長) そうですね、若い人は是非「自らの意思」を持っていろいろなことを行うことで、上に言われるからでなく、自分で面白いと感じることはいろいろ行い、その中で特に面白いと持ったことを、しっかりとやり遂げる姿であって欲しいですね。

(会長) ところで、養毛様は、技術畑を歩いてこられたのですが、社長という経営的な立場になられたわけですが、今後若手が同じ道を歩むに当たって参考になるようなことはありますか。

(養毛社長) いや、特に問題はありませんよ。とにかく企業には人材が多く、周りが助けてくれます。ただ、話の理解のための企業経営や経済など勉強化しました。表面的かも知れませんが。

理系から社長へは難しいとも言われますが、常識的な判断を着実にしてゆけばいいのです。また、一人でやるのではないので、いかに周りに人材を得るかが大きいでしょうね。

(会長) ダイヘンさんは、先ほどからお話のように研究開発型の企業であるということですので、技術を先導するようなリーダーが重要かと思われませんが。若い人々への期待はどうか。

(養毛社長) そうですね、特別の能力を要求するわけではなく、好奇心と熱意を持って、世の中の動き、周りの技術を自分なりに十分に調べ、これをやりたいと考えていって欲しいですね。

工学部教育に望むこと

(会長) そのような観点から、現在の大阪大学工学部・工学研究科に対して望まれることはありますか。

(養毛社長) 毎年、大阪大学から何人かを採用しており、優秀な学生が多いと感じています。ただ、最近の学生さんは、モノを触ったことが少ないのが実感です。工学部であるからには、例えば電気回路、電子回路などで、実際に動かして、失敗し、改良したとの経験が欲しいですね。

(会長) 確かに、実体験は、最近は従来の実験体験などと異なり、体験の質も変わってきているのが実情で、例えば、生産科学コースで、かつて溶接工学科と言っていた時分には、アーク溶接や機械加工実習がありましたが、いまは行われておりません。その必要性については議論のあるところですが、体を動かしての実習の必要性は、更なる議論が必要で、また、産業界からその点もご指摘いただくことが望まれます。

現実には、いまのような就職のためのインターンシップでなく、実質的な就業体験としてのインターンシップを企画・実施していただくことも必要でしょう。

溶接技術実習に関しては、ダイヘンさんの方で講義の中で実際に実施していただいているようで、有難いことです。

(養毛社長) 確かに、いまの学生さんは旋盤などの機械加工の実習は機械工学科を除いてはほとんど経験しておらず、特に、安全性に関する知識が乏しいのではないのでしょうか。その点は、ロボットの開発などで必要な情報で、どこまで思い及ぶかが問われますね。

そうですね、必ずしも昔のままのモノがよいというわけではなく、基盤的なモノと発展させるモノなどのバランスを考えつつ、とにかく手を動かすことも重視していただければと思います。

(会長) 大事なポイントは、いま産業界が求めるモノと大学が考えるモノとのミスマッチがないかということでしょうか。工学教育のあり方について、是非産業界からもいろいろとご意見いただきたいですね。

(養毛社長) 大阪大学の大きな特徴の一つでもある産学連携・共創によって、産業界の発展に貢献いただくこと期待しております。

(会長) さて、いろいろな事情や大学や若い人々への期待などをお聞かせ頂きましたが、経営者の立場から見て、今後人は少なくなることを事実ですが、少なくとも大阪大学の卒業生の数が減ることはしばらく考えられないでしょう。ただ、単にこれまで阪大卒ですよと言うだけでは問題があるかも知れません。そんな中で、企業として今後求める人材像・人物像についてはどのようにお考えでしょうか。

(養毛社長) そうですね、難しい問題でもありますが、企業としては、専門性などは今後大きく変化することも考えられ、大学を出てくる人材としては、自ら考え、また考えを発信できる人物に期待します。

(会長) このような人間力はなかなか大学での教育では難しい気がしますが、このような人材育成についての基本的な点についてこそ、産学連携が必要なのかも知れませんね。

人を創ることは真剣に考える必要があるでしょうね。

(会長) 最後に大学との関係もありますが、経営環境という点では、最近はニューノーマル時代などと新しい時代が訪れるので、対応しなければならないと叫ぶ人々がいるのですが、どのように感じておられますか。

(養毛社長) そのような声も聞こえますが、特に何も変わってないと感じます。時代と共に環境が変化することは当然ですが、それに対応していく製造や経営の基本はいつの時代も変わらないと感じます。ただ、変化に対応する能力が求められており、見通せる力があれば何ら変わらないでしょう。ダイヘンは技術開発が柱であると申し上げてきましたが、この技術力が衰えなければ変化に対応できていくと考えています。

[おわりに：「Done is better than perfect.」](#)

(会長) 長時間にわたっていろいろとお話し頂きありがとうございました。それでは最後に皆様にお聞きしているのですが、「座右の銘」をお聞かせ頂けますか。

(養毛社長) 座右の銘というか、大事にしている言葉が、

Done is better than perfect.

です。座右の銘とかは特に持ってなかったのですが、自分の気持ちに一番近い言葉として選びました。これは完全を目指すよりは、さっさとかたづけなさいということで、実行することの繰り返しで事を成し遂げた方がよいとの考えです。完璧な計画を創ろうと時間を費やし苦勞するよりは、さっさとできることをしていく方がよいとの考えです。

(会長) それでは本日は貴重なお話を長時間にわたっていただきましたが、同窓会としてもますますのご活躍を祈念しております。

本日は誠にありがとうございました。



(参考)

養毛 正一郎 代表取締役社長様 経歴

1963 年 1 月 1 日 鹿児島生まれ
1987 年 3 月 大阪大学大学院工学研究科 電子工学専攻修了
1987 年 4 月 株式会社ダイヘン入社
2007 年 6 月 APS 事業部長
2011 年 6 月 執行役員
2013 年 4 月 半導体関連機器事業担当 技術開発本部副本部長
2013 年 6 月 取締役 執行役員
2014 年 4 月 技術開発本部長
2015 年 4 月 技術担当営業担当(プラズマシステム営業)
2016 年 4 月 営業担当 (プラズマシステム・ワイヤレス 給電システム営業)
2017 年 4 月 取締役 常務執行役員
2021 年 4 月 代表取締役社長

【註】

「Done is better than perfect.」:

「完璧を目指すよりまず終わらせろ」とでも訳すのでしょうか。

この言葉は、フェイスブック創業者であり、世界長者番付常連のマーク・ザッカーバーグの言葉である。

以下は、「未来のいつか/hyoshiok の日記」より抜粋

The Hacker Way is an approach to building that involves continuous improvement and iteration. Hackers believe that something can always be better, and that nothing is ever complete. They just have to go fix it – often in the face of people who say it’s impossible or are content with the status quo.

Hackers try to build the best services over the long term by quickly releasing and learning from smaller iterations rather than trying to get everything right all at once. To support this, we have built a testing framework that at any given time can try out thousands of versions of Facebook. We have the words “**Done is better than perfect**” painted on our walls to remind ourselves to always keep shipping.

(<http://hyoshiok.hatenablog.com/entry/20140825/pl>)

【インタビュー後記】

今回は、十三にある株式会社ダイヘン本社を訪問して、インタビューさせて頂いた。この本社へは5年ほど前に、日本ものづくり大賞の審査で訪問させて頂いて以来2度目でした、

ダイヘンさんは、個人的なことではありますが、ダイヘン様は溶接工学を専攻してきましたものにとって、切っても切れない関係であり、古くは学生時代にも工場見学や実習にも伺いましたし、当時の長谷川元社長様の講義も受けました。また、大学院の修士の研究で「千里丘」の旧工場にあったフラッシュバット溶接機をお借りして、研究に不可欠な低強度部を含む継手を造るための溶接に数週間通わせていただいたこともあって懐かしくもあります。その意味で今回このようにインタビューさせて頂きことは、縁でもあり、ありがたいとも感じました。その意味で馴染みが深い会社ではありましたが、溶接機器分野のシェアは大きいものの、まだまだ活発な研究開発で種々の新しい技術開発などに力を入られていることから次世代事業の広がりを感じていました。

養毛社長様は、若々しくて活力ある感じが伺え、また、前もつての特段の内容についてのお願いもせずに、当方の方から話題を提供する形で進めさせて頂いたにもかかわらず、誠実にお考えを述べて頂きました。

とにかく、研究開発を重視され、開発を担う若手の活性化に誠実に対応し、「技術開発のダイヘン」の展開に力を注いでおられることが伺えました。その研究開発には、諦めない熱意の大切さ、やり続ける力を強調され、日々勉強であるとの指摘は、学生さん達に伝えるべきものであると感じました。

事業展開も重点をしばり、開発費を確保して、社会に貢献できる技術開発へつなげるという固い意志は、今後の更なる発展が期待されます。

今後のますますの発展を祈念して、インタビューを終えさせて頂きました。

(大阪大学工業会 会長 豊田 政男)